

神の子とその栄光

【聖書箇所】 8章 14～17節

はじめに

●ある人は、ローマ人への手紙 8章をローマ書の山頂とも、新約聖書の山頂とも言っています。つまり、この箇所は聖書の中でも神の最高の恵みを私たちに教えている箇所なのです。とすれば、この章で書かれていることが理解できないなら、ローマ書は難しい謎の書となってしまいます。それほどに重要な箇所なのです。聖書は普通の本とは違って、人間の知恵では理解することができません。なぜなら、聖書は神の息吹、すなわち聖霊によって書かれたものだからです。それゆえパウロは、「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。・・またそれを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。」(Iコリント 2:14)。従って今回も、神の御霊、キリストの御霊の助けと導きをいただきながら、神が私たちに賜った恵みを知ることができる者とさせていただきたいと思えます。

1. 神の御霊に導かれる特権(導きを受ける特権)

●今回はまず、14節のみことばに注目したいと思います。そこには「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです」とあります。「導かれる」という表現は受け身です。私たちがはじめて教会に行ったとき、クリスチャンホームである場合を除けば、だれか手助けしてくれた人がいたはずで。たとえば、どこに座ったらよいか、聖書のどこを開ければよいか、導く人がいてはじめて安心できます。また自ら求道するようになって導く人が必要なのです。そこには導く者と導かれる者がいます。この関係がよりよいものであるなら、そこにすばらしいことが起こり得ます。

●聖書によれば、神の御霊に導かれている者だけが神の子どもです。そこには導く神の御霊の責任と、その導きを受ける特権を与えられている神の子どもとのかかわりがあります。ローマ書 8章には、「御霊」とか、「聖霊」という言葉がたくさん使われています。7章では「私」とか「自分」といった言葉が多く見られましたが、8章では神の御霊、聖霊が主導権を握っています。つまり、あなたがたは「御霊で始まった」、「御霊によって生まれた」のだから、「御霊によって歩みなさい」、「御霊によって生きなさい」、「御霊に満たされなさい」「御霊に導かれて進みなさい」「御霊のために蒔きなさい」「聖霊を悲しませてはいけません」「御霊を消してはなりません。「御霊の与える剣である神のことばを受け取りなさい。」「どんなときにも御霊によって祈りなさい。」・・・

●これらの表現は、キリスト者は聖霊の主導権のもとに、聖霊のご支配の中に導かれて生きる存在なのだということをはっきりと自覚することを求めています。神の御霊をうちに宿している者の果たすべき責任があるとすれば、この聖霊の支配のうちに生きるという責任です。御霊にゆだねて、御霊にまかせて生き

るという責任です。あなたは自分の力や努力や頑張りや熱心さで神を喜ばす責任は何一つ負わされてはいません、ただ内に住まわれる(内住される)御霊にすべてをゆだねるという責任だけが求められます。ですから、もし私たちが御霊の臨在を忘れるならば自動的に、肉の力、肉の頑張りで、つまり自我で、自分中心で主に仕えることとなります。そもそも私たちが自覚的に、意識的に御霊に従って歩もうとしないことが肉であり、肉の思いは神に対して反抗する性質であり、神を喜ばすことができないのです。そのような葛藤の経験を繰り返しながら、「肉の思いは死であり、御霊の思いはいのちと平安」だと次第に気づき、納得するようになるのです。

●「神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格をくださいました。」(Ⅱコリント 3:6)とあります。ここでの「新しい契約」とは何でしょうか。それは「古い契約」と対立するものです。「古い契約」とは、神の律法に対して、心を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして神に仕えることを求めます。しかしその助けは一切ありません。ただ要求するだけです。しかし「新しい契約」とはその律法を神が私たちの思いの中に入れ、私たちの心に書きしるす・・・ことで、小さい者から大きい者に至るまで、彼らはみな主を知るようになるのです。人から「主を知れ」と言われなくても、です。この新しい契約に仕える者となる資格を神は私たちに与えて下さったというのですが、その資格とは助け手としての神の御霊が注がれているという事実によるものです。神の愛が自分に注がれていることが自覚できるのも聖霊の働きです。ですから、「肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされる」のだとパウロは述べています。

●このように、聖霊は私たちにただ神の子としての資格や身分を与えて下さるだけでなく、私たちに神の子どもとしての実質を造り上げて下さるすばらしい助け主なのです。この方こそ、私たちをキリストにふさわしい者に導いてくださるのです。ある時は励まし、ある時は「試練」の中を通させることもあります。ある時は、新しい真理に目を開かせて霊の感動を与えてくださることもあります。ある時は途方にくれる状況の中で一縷の望みを与えてくれるかも知れません。私たちに絶えず寄り添いながら、私たちが神のみこころにそって歩み、成長できるように導かれる神の御霊の存在が与えられているということは、何とすばらしい恵みでしょうか。

●詩篇 51 篇でダビデは、「あなたの御霊を私から取り去らないでください。」と預言的な祈りをしています。罪とは聖霊に主導権を明け渡さずに、むしろそれを無視して、自分中心に事を行なうことです。そのためにダビデは罪を犯しました。それゆえダビデは「まことに、私は自分のそむきの罪を知っています・・・私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。」と告白し、さらに「神よ。私にきよい心を作り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。喜んで仕える霊が、私をささえますように」と祈ったのです。

●キリストを信じることによって、私たちの内に住まわれる聖霊は、私たちに神の子としての実質を造り上げてくださる方です。そしてこの方は、私たちを実質を備えた神の子としてふさわしい者とするために、一切を導かれる方なのです。主体は御霊です。神の御霊が私を導いて、神の子としてふさわしい者として

くださるのです。私たちはただ神の御霊におゆだねするだけです。

●それぞれ自分の胸に手を当てて問いかけてみましょう。「私はこの御霊を慕って満たされることを求めているだろうか。御霊とともに歩んでいるだろうか」と。もし、そのような問いかけをしつつ、御霊に導かれているなら、神の子どもと言えるのです。ある賛美歌に次のような歌詞があります。

御霊の流れのままに私たちは進もう
御霊の導きの中を私たちは歩もう
巡り巡り風が吹く 御霊の風が私たちの国に
御霊の思いのまま歩み続けよう

「風はその思いのままに吹く」ように、御霊もその思いのままに吹くのです。ですから、それに敏感にならなければなりません。

●使徒の働き 16 章に「聖霊によって禁じられた」「イエスの御霊がそれをお許しにならなかった」とあり、御霊はある方向へとパウロたちを導かれました。それが本格的な異邦人伝道(ヨーロッパ伝道)への契機となっていたのです。パウロの思いとは異なりましたが、それが神のみこころだったのです。パウロはその御霊の導きに敏感でした。

●私たちが御霊に導かれるということは、神の子どもに与えられた特権です。神の愛のしるしとも言えるでしょう。私たちが神のご計画において実り多い生涯を送れるようにと、神が愛のうちに備えてくださったのです。御霊が私たち一人ひとりを導かれるのです。また、御霊が私たちの教会をも導かれます。そのことを信じましょう。進むべき時も、あるいはとどまるべき時も、御霊の導きを敏感にキャッチして歩んで行きましょう。

2. 御霊は私たちが祈りに導かれる

●次に、16 節に目を留めましょう。

「あなたがたは、・・・子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父。』と呼びます。」とあるように、神の御霊は祈りの霊です。祈りは神の賜物である御霊が寄り添っておられる証拠です。キリストによって新しく生まれた者でなくても祈りはできるでしょう。しかしそれは「父」である神に向かったの祈りではありません。偶像に向かって祈る祈りです。しかもその偶像の背後には悪霊が存在しています。「子としてくださる御霊を受けた」ということは、神を「父」と呼ぶことができる者となるということです。

●クリスチャンとなって神の御霊に導かれる神の子どもは、祈りを必要としています。つまり神との交わ

りであり、神への語りかけであり、神からの語りかけを聞くことを含んでいます。霊的な成長において祈りは欠かせません。「アバ」ということばはアラム語で、父を非常に親しく呼びかける言い方です。今日では「パパ」と言ったところですが、昔は「トツツアーン」とか「とうちゃん」、あるいは「親爺」でしょうか。人それぞれに父を親しい言い方で呼んで良いということです。

●呼び方も大切ですが、それ以上に大切なのは、父とともに過ごす時間を大切にすることです。これは「ひとりになる」ことを意味します。イエシュアもしばしば人々から身を引き、寂しいところへ退き、だれにも邪魔されないところで、父なる神と個人的な交わりの時を過ごされました。またイエシュアは弟子たちを連れて、人気(ひとけ)のない寂しい所に行き、彼らと交わり、彼らを教えられました。

●私たちの生活や働きが忙しくなればなるほど、祈りの時間が割かれてしまいます。むしろ反対に忙しくなればなるほど、祈りの時を大切にされたのがイエシュアでした。なぜなら、すべての働きの知恵と力の源泉は祈りの中にあるからです。祈りを忘れた働きはやがて力を失い、いのちが枯渇して、疲れ果ててしまいます。反対に、聖霊による祈りは常に神からの新しい力と知恵が与えられ、それほど疲れ果てるということはありません。ですから、主にある者たちは、神との交わりの時、つまり祈りの時間を豊かに持つ必要があるのです。

●天の父はその愛する子との親しい交わりを尊ばれます。ですから、御霊は祈りを通して神との親しい交わりへと導かれるのです。御霊による祈りは時間を忘れさせるような魅惑的な交わりをもたらします。神のことばを瞑想し、それを味わい、その中で神の細き声に耳を傾けるのです。御霊は神とのこの霊的な交わりを楽しませ、より貴重なものとして感じさせます。何度も何度も、日ごとに聖霊に満たされることは、私たちの魂が満たされることと同義です。また、祈りに長い時間を費やすことと御霊に満たされることは比例しているのです。

●御霊は神との親しい交わりを可能とさせる「祈りの霊」です。それゆえ、私たちは祈りによって、新しい、深い導きが与えられます。今まで見えなかった真理に気づかされます。また、熱い期待をもって神を待ち望ませます。「若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、驚のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」(イザヤ 40:31)とあるように、力の刷新をもたらしてくれるのです。

●私たちが祈りという価値あることに時間をかけずに、他のことに時間をかけているならば、刷新されるという経験は乏しくなります。むしろ、時間をかけていることによって支配されることとなります。とすれば、天にあるすべての霊的な賜物を人に分かち合うことはできません。神にとって無益な存在となってしまうのです。私たちに与えられている御霊は祈りの霊です。それは天にあるすべての霊的祝福を刷新し、満たしていく神の力です。ですから、恐れることなく、むしろ期待をもって、神を「求め続け、捜し続け、たたき続けて」、祈りの世界を楽しむ者となりましょう。霊的な楽しみと喜びの至福は、すでに御霊によって保証されているからです。

1995.2.26